

生徒指導の三機能を生かす音楽授業のあり方に関する研究 —学級担任による音楽科の指導の特性を生かして—

教科・領域教育専攻
芸術系コース（音楽）
河野 真紀

指導教員 長島 真人

はじめに

わが国における音楽科教育は、「豊かな情操の育成」を目標として行われてきた。これは、音楽というものが、感情にはたらきかけ人格形成に深く関わるものであることをあらわしている。しかし、その概念がわかりにくく、個人的、感覚的な満足で終わってしまったり、知識や技能の習得といった指導にかたよってしまったりする現状も少なくない。さらに、このことが、子どもたちの音楽の学びや人格形成に望ましくない影響を与えていることや、教師に専門的でハードルが高い教科ととらえさせ、小学校においても専科教師にまかせるといった実態を生み出していることは、憂慮すべき問題である。このような実態をふまえ、あらためて音楽科教育の本質を見直し、学級担任の特性を生かした指導について研究する必要性を感じた。

そこで、学級担任が主体となる生徒指導に着目し、その機能や音楽科教育との関連について明らかにする。そして、複雑な現代社会の中で子どもたちが豊かな情操を養い、自己実現できる力を育てていくために、生徒指導の機能や学級担任の特性を生かした音楽科授業について検討することを目的とする。

1. 生徒指導の意義と機能

現在、学校教育の中で重視されている生徒指導は、戦後にはじめられた民主主義にもとづく生徒指導（ガイダンスによる生徒指導）の路線

上の発展であるといわれ、平成 22 年に発行された『生徒指導提要』には、「生徒指導が、教育課程の内外において一人ひとりの児童生徒の健全な成長を促し、自ら将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」という積極的な意義が述べられている。つまり、特定の児童生徒に対する問題行動への指導ではなく、全ての児童生徒に対する教科学習の時間も含めた学校教育活動全体での指導が必要とされているのである。

生徒指導が目指す自己指導能力とは、生徒が目標の達成を目指し、自主的に判断、行動し、積極的に自己を生かしていく能力であり、その育成のためには、(1)「自己決定の場」を用意すること、(2)「自己存在感」を与えること、(3)「共感的な人間関係」を基盤にすることに留意するよう示された。これは、現在、生徒指導の三機能として知られており、教科指導において機能させることによって、本来の各教科のねらいの達成だけでなく、学習への意欲や共感的関係といった感情の領域に働きかけ、人格形成に大きく貢献すると考えられている。

2. 音楽科の指導における生徒指導

音楽には、人間の生き方や主観的な真実の世界が込められており、それを探究することによって自分の中に潜在していた感情を呼び覚ますことができる。また、それを分かち合うことによって、集団の心を繋ぎ、道徳心や規範意識を

高めることができる。

このような特性から、子どもたちは、音楽の美しさを探究することによって、音楽に対する感性を豊かにし、楽曲にこめられた共通感情を分かち合い、人を思いやる心や、自律心、向上心といった生きる力を養っていくことができる。これが音楽科のめざす「豊かな情操の育成」であるといえる。

そこで、音楽科の指導にさらに生徒指導を機能させることによって、子どもたちの内面に深く働きかけ、音楽科の自主的な学びや集団での学び合いを保障することができると考えた。そして、その実践が音楽科のねらいの達成はもちろん、自己指導能力の育成にもつながることを期待し、具体的な手立てを考えることにした。

3. 生徒指導の機能を重点的に取り入れた音楽科の指導の実践と考察

先に述べた生徒指導の三機能のうち、「共感的関係」を育てることに重点をおき、6年生の15名の児童を対象に音楽科の授業実践を行った。『語りあおう』（教育出版 6年生教材）を斉唱することを通して、歌の気持ちである「苦しいことも楽しいことも分かち合える仲間の絆」を感じ取らせることをねらいとした。

指導者が、楽曲のポイントとなる部分を把握し、歌詞と音楽との関係を提示することによって、子どもたちは、自然に歌の気持ちを感じ取ることができた。そして、自分たちの経験を思い出し、友達と支えあうことの大切さに気づくことができた。また、パフォーマンス課題を設定し、自己決定しなければならない場面が多くなったことによって、自分の思いを伝え、分かち合う場面も増えたことは、共感的関係を育てる上で効果的であった。しかし、一人ひとりの実態に応じた指導という点では、やはり、子

もたちのことを一番理解している学級担任が指導をすることが最も有効であることを実感した。

4. 専科教師と学級担任の T.T.による音楽科の指導の実践と考察

先の実践の結果から明らかとなった、楽曲のポイントを見極めて音楽との関係で示すことの重要性と、学級担任が指導することの効果を生かすために、専科教師と学級担任の T.T.による授業実践を行った。

3年生の20名の児童を対象に、「組曲アルルの女」から『メヌエット』と『ファランドール』（教育出版 3年生教材）を鑑賞することを通して、音色や音楽の仕組みのおもしろさ、曲想を感じ取って分かち合うことをねらいとした。

鑑賞においても、指導者と子どもたちが、楽曲のポイントとなる部分を探究し、分かち合うことによって、学びが深まることが確認できた。そして、全員が参加し、一人ひとりの思いが認められる授業を目指したことが、自己存在感や共感的関係を育てることにつながった。指導者と子どもたちとの間に、ある程度の共感的関係があったこと、学級担任が、適切な場面で子どもたちの実態に合った支援をしてくれたことが、その重要な基盤となっていたことから、音楽科の指導と生徒指導には、補完関係があることが明らかになった。

おわりに

本研究を通して、生徒指導の三機能を生かした学級担任による音楽科の指導は、子どもたちの自ら学ぶ意欲を高め、人格形成に大きく貢献するとともに、音楽科のねらいをも達成することができることが明らかになった。しかし、授業時間の確保や専科教師と学級担任との T.T.など、学校現場では実現が難しい面も多く、今後どのように実践していくかが重要な課題である。